

モビリティと物質性的人类学

目次

第一部

ともに行く／変容する——身体

第1章 「儀礼化」する現代徒歩巡礼——反復の氾濫による連続性とその時空	
	土井清美 25

第2章 ケニアの自転車競技選手の「ラウンドな世界」 ——移動を重ねてならされる、滞留がサイクルする日常	萩原卓也 49
--	---------

第3章 移動する身体と身分証 ——インドにおけるチベット難民の移動をめぐる物質的实践	片雪蘭 73
---	--------

第4章 モバイルハウスの民族誌 ——動く住まいとノマドの共生をめぐる日米仏の事例から	左地亮子 93
---	---------

第二部

作り出す／反転する——インフラストラクチャー

第5章 環境に棲まうインフラ——流れ橋が刻むリズムと集める空間	
	難波美芸 117

第6章 不可視性に抗して〈観る〉ために ——ジープニーをケアするインフラ労働	西尾善太	137
--	------	-----

第7章 未知の故郷への帰還 ——ソロモン諸島マライタ島の道路建設にみるインフラストラクチャーの両義性	橋爪太作	161
--	------	-----

第三部

探る／流動する——環境

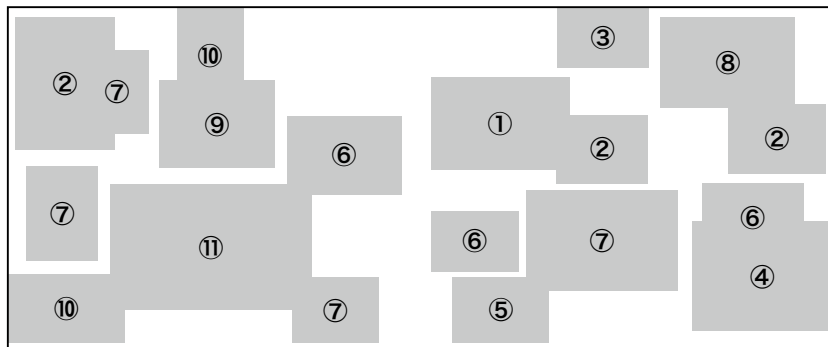
第8章 ヒマラヤ山岳観光のモビリティと斜面の質感 ——山間部の移動をめぐる変化と連続性について	古川不可知	187
---	-------	-----

第9章 多島海のナビゲーション——環境のなかを動く身体	中野真備	209
------------------------------------	------	-----

第10章 定住した移動民のモビリティ ——北西インドに暮らすジョーギーの野営と住まい方	中野歩美	227
---	------	-----

第11章 難民移動とポリティクス ——逃避と越境における南スーダン人の身体、感覚、滞留	村橋勲	251
---	-----	-----

あとがき		272
執筆者紹介		275



カバーに掲載されている写真の該当する章

* 本書掲載の写真のうち、特に記載のないものは当該章執筆者の撮影による

序章 物質の世界をかきわけて

古川不可知

1 はじめに

いわゆるグローバル化の進展にともなって、人々の移動はますますその速度を増し続けている。ビジネスや観光のために、あるいは移民や難民として無数の人々が地球上を動きまわり、生業活動や巡礼といった既存の「伝統的な」移動様式もまたグローバルな移動のフローとの接続や、新たな輸送技術の導入によって変容していく。

だがマクロな現象としての移動や、移動する人間主体についてはこれまで様々な観点から論じられてきたものの、人々がいかにその身体を用いて移動していくのか、どのようなモノ (object) や構造がそれを可能とするのか、また移動することが身体や環境にいかなる痕跡を残すのかといった、動くことの過程にともなって生じる人と事物 (thing) や環境との関わりという側面については十分に考究されてきたとは言いがたい。多くの研究において移動する人々は、観察者からは遠目に眺められる対象であり、大地の起伏や事物の質感を感じ、乗り物に揺さぶられ、汗をかきながら移動していく彼／彼女らの、そして「私」の経験は、その記述からしばしば抜け落ちてきた。

本書の目的は、世界各地の移動実践とそれを可能にしてきた身体やインフラ、事物のありようについて、「物質性」をキーワードに考察することである。移動をめぐる日々の営みを追い、それがグローバルな文脈と接続することによって変容していく様子を比較しつつ考察することで、移動することのうちに生起する個別具体的な実践と経験を描き出していく。

* * *

移動を研究することの重要性は近年つとに指摘されるようになった。移動研究を主導してきた社会学者のジョン・アーリは、移動が社会活動の基礎となる現在の状況と、それを捉える学術的観点の同時的な転換を、「移動論的転回／モビリティーズ・ターン (mobilities turn)」と名付けている [アーリ 2015]。

もちろんそれ以前から、移動は様々な分野において論じられてきた。モビリティという主題はそうした研究を取りまとめて一望するためのフレームワークと考えることもできる。だが同時に人類学がこれまで明らかにしてきたのは、世界各地の人々は多かれ少なかれ移動のなかに生き続けてきたということでもあった。たとえばトロブリアンド諸島の人々は島々をカヌーで往来し [マリノフスキ 2010]、ヌアールの人々は牛とともにサバンナを移動する [エヴァンズ=ブリチャード 2023]。「モビリティという主題は、先住民の人々にとって新しくはない」 [Whyte et al. 2019: 325] ということである。なにしろ人類は、そもそもアフリカから世界各地へと移動することによって現在の形質のかつ文化的な多様性を獲得したのだ [海部 2022]。

すると移動の卓越を現代の例外的な状態とみなす観点の裏には、定住民中心的な思考のバイアスが存在することになる。そうであるならばむしろなされるべき作業は、様々な地域の具体的な移動実践を私たち自身のものも含めて比較することによって、モビリティを「転回」と捉える発想の背後に横たわる文化社会的状況を相対化していくことであろう。後段で詳しく見ていくように、移動を地として社会的なものを捉え直す分野横断的な思考のあり方を、アーリはモビリティーズ・パラダイムと呼んでいる。人間／非-人間^{*1}を含むあらゆる移動を分析の射程に収めようとするこの図式は、総花的ながらその包括性の点で際立った有用性を備えたものだ。したがって文化人類学に課されたタスクとは、アーリの議論そのものの批判を試みるというよりも、様々な地域から民族誌的事実を積み重ねることによってこの枠組みに内側から重みをかけていくことだと考えられる。

本書は国立民族学博物館において2019年10月から2023年3月にかけて行われた若手共同研究、「モビリティと物質性的人类学」の成果論集である。私たちは移動をめぐる現地の概念に着目しつつ、人々が移動するその実践へと実

* 1 アーリらも自ら「新しいモビリティーズ・パラダイムは、問い、理論、方法論の一式を提案するものであって、現代世界の総合的な記述を提案するものではない」 [Sheller & Urry 2006: 210] と述べている。

際に参与することを基本的な方法論と定め、議論を重ねてきた^{*2}。各章では、世界各地の人々が様々な事物に満ちた多様な環境のなかをそれぞれのやり方で移動していく様子が報告される。本書では移動することの物質的側面を前景化することで、北西インドの遊牧民やインドネシアの漁撈民といった人々の「伝統的な移動」とその変容から、ガイドアプリが導入されたサンティアゴ「巡礼」や車道建設の進むヒマラヤ「観光」、書類に媒介されながら移動／滞留するチベット「難民」まで、これまでは別個の文脈のもとで論じられきた様々な移動のあり方を、流動する物質の世界をかきわけて進む営みとして同一平面に描き直していく。このことは、地球規模で確かに接続しつつある世界の移動を連続性のもとに捉えると同時に、グローバル化の過程で均質化していくように見える移動のやり方のうちに絶えず新たな意味と実践が生じる様子を明らかにすることでもある。

2 モビリティと物質性の概念をめぐって

移動は人間にとって不可欠の営みである。また移動することは、人間の身体が諸物とかかわりながら環境のなかで位置を変えるという本源的に物質的な営みでもある。ここでは紙幅の関係上、モビリティ概念についてアーリの議論を中心に確認したのち、移動をめぐる人類学の先行研究を瞥見し、物質性を焦点化することの意義について考えていきたい。

2-1 モビリティーズ・パラダイム

モビリティの語は近年、学問に限らずビジネスや行政など様々な分野においてキータームとして用いられている^{*3}。人文社会科学においては、アーリらが2006年に発表した一連の論文 [Hannam et al. 2006; Sheller & Urry 2006]、および2007年の著作『モビリティーズ』[アーリ 2015] において提起した「移動論

* 2 モビリティを研究する者は、「ネイティブに向かって旅をするだけでなく、ネイティブのように旅をしなければならない」[D'andrea 2006: 114] のである。

* 3 「モビリティ (モビリティー)」というカタカナ語は、「朝日新聞記事データベース」の検索結果としては本章執筆の2024年1月時点で総件数1,300件である。初出は1988年であり、この年の記事6件のうち4件はサーキット場の固有名詞であり、2件は転職をより自由にと意味での「モビリティ」であった。2000年代に入るころより「モビリティ」をめぐる記事は増加し、2023年は126件を数える。

的転回」によって多くの研究が触発され、英文誌 *Mobilities* などを中心に知見が蓄積されてきた。

アーリは、「移動が多種多様な「社会」に見られ、そうした「社会」の構成に与していること（中略）そのことがとりわけあてはまるのが、現下のグローバルな時代なのである」[アーリ 2015: 31] と述べ、「これまでの社会科学は概して「非動的」であった」[アーリ 2015: 34] ことを指摘する。すなわちアーリの言う「移動論的転回」とは、世界と社会理論の同時的な変容を指すものである。^{*4}

吉原直樹によれば、それまでの社会学的な移動研究は階層移動に焦点を合わせていた。また空間移動の研究も、合理的選択を行う個人によってなされるものと捉えられていた [吉原 2022: 2-3, 2023]。モビリティーズ・パラダイムは、そのような「線形的な」移動には還元しきれない、人やモノや情報が複合した予期せぬ流動性を捉えるために展開してきたものであるという。ここにはインフラや情報通信技術の発展、グローバル化の進展などにもなつて、静的な空間という前提が揺らいできたことが背景のひとつとなっている。^{*5}

移動論的転回を経ることによって「[社会的世界]を幾多の経済的、社会的、政治的な営為、インフラ、イデオロギーの集列……として理論化することが可能になる」[2015: 32] とアーリは述べている。彼にとって「移動論的転回」とは、土地に根付く静的で境界を備えた「社会」が形をなさなくなった現代の世界において「社会的なるもの」を位置づけなおすことを目的としていたと言えよう [アーリ 2003, 2006も参照]。^{*6}^{*7}

* 4 アーリ自身も「社会学における「新しいモビリティーズ・パラダイム」と、世界における「新しいモビリティーズ・パラダイム」とは切り分けることができる」[Sheller & Urry 2016: 19] と述べていた。他方でマルセル・エンダースらは、むしろモビリティーズ・パラダイムの言説が社会的現実を構成する側面を指摘している [Endres et al. 2016]。

* 5 「移動論的転回」の前段階に位置づけらる「空間論的転回」は、社会認識が「社会的なるもの」を「境界付けられたもの」、「仕切られたもの」とみることから離脱することにはじまっていると吉原は述べる [吉原 2022: 129]。「移動論的転回」では、さらに空間の安定性という前提も問い直されているわけである。

* 6 アーリは、モビリティの語に4つの意味があることを指摘し、そのすべてがモビリティ研究の対象になるという [アーリ 2015: 18-19]。すなわち、①移動しているか、移動可能なもの (e.g. モバイルフォン、モバイルパーソン……)、②暴徒、野次馬、野放図な群衆といった、追跡と統制の必要な無秩序、③上方ないし下方への社会的移動、④より長期的な、移民や半永久的な地理的移動、である。

* 7 こうした観点は数多くの議論を喚起し、徒歩から飛行機にいたる多様な移動手段が分析され、ジェンダーや人種、権力と資本、エネルギー、モノや情報のモビリティなど、様々な

アクターネットワーク理論からも大きな影響を受けて形成されたこのような関心 [小川 (西荻) ほか (編) 2020 も参照] に沿ってアーリが指摘するのは、従来の社会科学においては移動がブラックボックス化されてきたことであり、また主体の相互作用に関心が集中するあまり、社会生活の基盤を支えているシステムが看過されてきたことであった [アーリ 2015: 24-25]。こうした観点は、西洋近代の思考に根深い人間中心主義を乗り越えようとする近年の人類学とも方向性を共有している^{*8}。

その一方でモビリティ研究の関心は、主に西洋近代の都市部あるいはそのグローバルな延長部分を焦点化するものである。例えばインフラは世界を均質化し、世界を旅するビジネスマンは、地球上のどの地点においても類似した経験を被るかのように描写される [エリオット&アーリ 2016]。アーリやシェラーの提示するいくつかの未来も、予測不可能であるにせよ世界を覆いつくすものとして描かれている [アーリ 2015: 398-427; Sheller 2021: 99-120]。しかしながら地球上の大部分は (ある程度まで) 平滑で均質化された近代的な都市空間とは異なり、様々に異なった起伏や質感、気候などを伴うものである。異なる環境のもとでは、同一の機械であってもその意味や物理的・形状さえ変化し [森田 2012]、車道建設に際しては普遍的とみなされる工学的知識もまた固有の物理的／文化的環境に対して調整されねばならない [Harvey & Knox 2015]。こうした事実からは、少なくとも傾向としては一般化を志向するモビリティーズ・パラダイムの視点に抗して、微細な差異を絶えず生み出していく身体・事物・環境と文化の布置を捉えるミクロな観点もまた要請されることになろう^{*9}。

2-2 人類学と移動研究

冒頭でも述べた通り、人類学においても移動は様々に論じられてきた^{*10}。た

トビックが議論の俎上にのぼった。整理とレビューについては各種の解説書 [e.g. Adey 2017; Sheller 2021] などに譲りたい。

- * 8 なお自然と文化という二分法の乗り越えはアーリ自身によってもより直接的な形で試みられてもいる [Macnaghten & Urry 1998]
- * 9 実際のところアーリは、身体やインフラといった移動の物質的側面には幾度となく注意を促している [e.g. アーリ 2015: 137-271]。だが結局のところ彼の関心は「社会」にあり、移動の要因が社会的な説明へと還元され、移動のうちに社会的なるものを見出しなおしていく過程において、その物質的な側面は捨象されてしまうように見えるのである [アーリ 2015: 275-427]。
- * 10 モビリティ研究に対する人類学の影響についてはピーター・アデイ [Adey 2017: 32-33] などを参照。

たとえば古典的なものとしては、季節に応じた社会の動態 [モース 1981] や、家畜とともに移動を繰り返す牧畜民 [エヴァンズ=ブリチャード 2023] の研究などが挙げられるだろう。またナビゲーションの研究は人々が環境中を移動する多様かつ洗練された術を明らかにしてきた [e.g. 野中 (編) 2004]。こうした研究は人々の「伝統的な」移動を論じるものと言えよう。ただしゲワーツが指摘するように、マーガレット・ミードが調査を行った1930年代には、調査地からの移民は考慮の外におくのが当時の人類学としては当然であった [Brettell 2003: ix; Gewertz & Errington 1991]。つまりかつての人類学では、研究者が措定する「伝統」や「文化」の領域を超えた「グローバルな」移動は視野の外に追いやられていたとも言える。

だが1986年の「ライティング・カルチャー・ショック」は、閉じた不変の「文化」という前提に冷や水を浴びせた [クリフォード&マーカス (編) 1996]^{*11}。1995年の論文においてジョージ・マーカスは、境界で区切られた小共同体を前提するのではなく、移動する人々を複数の地点で追うマルチサイトッド・エスノグラフィを提唱し [Marcus 1995]、ジェイムズ・クリフォードは「旅する文化」によって、研究者と同様に移動する対象者の双方の出会いから起こる相互的な経験と変容を論じた [Clifford 1992]。さらにクリフォードは『ルーツ』 [クリフォード 2002 (1997)] において、人類学者は社会文化的な形態とアイデンティティのルーツ (roots) を発見するかわりに、それらが (再) 生産される経路 (routes) にもっと目を向けるべきことを主張していた。

またこのころには、いわゆるグローバル化を背景に顕著となった新たな移動の形も論じられるようになる。なかでもアルジュン・アバデュライはグローバル化を5つのフローとして説明し、地球上を行き交う人や事物を人類学的に理解するための有力な枠組みを示した [アバデュライ 2004 (1996)]。現代世界の主たる移動の一方には娯楽のために地球上を行き交う観光とその人類学 [e.g. スミス (編) 2018 (1989)] があり、他方には生活や生存のために国境を越える移民や難民を扱う研究 [e.g. カースルズ&ミラー 2011 (2009)] がある。移動をめぐる近年の人類学的研究の多くも、それらを対象としたものである。^{*12}

ただしこうした研究の大部分では、移動そのものというよりはグローバルな

* 11 そこには移動する文化人類学者という特権性と、それに対する不動の現地人という暗黙の前提に対する疑義も含まれていた。

* 12 たとえば「岩波講座 文化人類学」の『第7巻 移動の民族誌』 [青木ほか (編) 1996] が取る3部構成は、それぞれ「観光」「移民」および「(は)ぎま」(ディアスポラ)である。

移動がもたらす言説や文化変容に焦点が当てられてきた。たとえば「文化のモビリティに向けて」と題した論文でノエル・サラザール [Salazar 2010] が論じていたのは、移民としての転出および観光客の来訪が常態となったタンザニアにおいて生じた新たな想像力と文化の変化であった。移民研究の文脈では「ホスト社会とその中に形成される移民社会との関係、とくにコンフリクト」が注目されてきたと指摘されるように [栗田 2018: 3]、倫理的・方法論的な制約は理解できるものの、ここでは「実際に動いていく」ことの現場はしばしば見落とされてきた。いわゆる難民の人々の強制移動や非正規移動を論じるヤニス・ハミラキスは、「[移動という] 現象の物質性や、感覚的で記憶的な次元についてはほとんど理解も分析もされて」こなかったと述べており [ハミラキス 2018]、類似した事態は観光研究についても多かれ少なかれ指摘できるだろう。

しかしながらとりわけ2000年代以降は、モビリティ研究との相互の影響および次節で述べる物質性への再注目のもとで、インフラストラクチャーなど移動の物理的構造に着目する人類学的研究も増えつつある [e.g. Harvey & Knox 2015]。またマルチサイテッド・エスノグラフィの方法論を援用しながら、人と事物と情報のグローバルな移動と絡まり合いを論じるアナ・ツインの『マツタケ』のような研究は、絶えざる移動の過程で各地に生じる不確実で異種混交的な帰結に着目する点において本書とも関心を共有している [チン 2019]。各章ではこうした潮流を背景としつつ、移動することそのものと、それを促す事物に焦点を当て、各地に固有の「伝統的な」移動を捉えると同時に、移動それ自体の変容を見据えていく。

2-3 物質性

人間の移動が物質的な営みであることは明らかであろう。私たちが移動するとき、どのような手段を用いるにせよ私たちの物理的身体はなんらかの事物を媒介に環境中でその位置を変化させる。それはただある場所から別の場所へと移るのではない。再びハミラキスを引けば、移動と滞留は周囲に足跡や野営の跡といった物質的な痕跡を残す一方、人々に個別の記憶と感情を喚起し、身体には疲労やときに指紋を隠すために焼かれた指先といった変化を残すように、身体と環境の双方に作用していく [ハミラキス 2018]。とはいえ物質性とはなにかをひとことで定義するのは困難でもある。^{*13}ここでは人類学におけるモノや

* 13 ダニエル・ミラーは物質性 (materiality) について、人工物を指すとともに、それを超え

物質性をめぐる議論を概観することで、その発見的な観点としての有用性を確かめることとしたい。

博物学の後裔たる人類学は、そもそも物質文化の研究として産声を上げたのであった。だが20世紀初頭から1980年代までのあいだ、その主たる関心は人間によって生み出される観念や構造へと向けられ、モノは文化によって意味づけられるだけの客体として後景に退くことになる〔吉田 2021〕。

80年代後半になると再びモノそのものへの関心が高まり、やがて脱人間中心主義的な観点から世界の把握を目指す議論とも結びついていく〔床呂・河合 (編) 2011; 吉田 2021〕。たとえばアパデュライらは、社会的文脈^{*14}のなかで事物が意味づけを変化させながら流通していく「事物の社会的な生活」について論じていた〔Appadurai 1986〕。またブルーノ・ラトゥールらによって展開されたアクターネットワーク理論が記述するのは、事物が人間や他の存在者たちと同等のエイジェンシーを発揮しながら、ネットワークとして事実や世界を作り上げる様子であった〔ラトゥール 2007〕。

こうした議論がとりわけ本書にとって重要であるのは、しばしば主体的な意志によって行われるとみなされがちな人間の移動を、周囲の事物とのかかわりのなかでなされる実践として捉え直すことができるからだ。たとえばラトゥールは、「〔飛行機で〕「人が飛ぶ」……といった類の見出しは、誤りか不正によるものである」と指摘していた。そして「飛ぶということは、空港と飛行機、滑走路、チケットカウンターを含む様々な実体の連関全体が持つ特質」であり、「行為は、単なる人間の特質ではなく、アクタントの連環の特質」〔ラトゥール 2007: 233〕だと述べる。ここでは主体と客体は画然と分かたれるものではなく、移動することの行為性はむしろ人間身体も含めた事物のあいだに分有されている。

このように移動を捉え直したとき、個物としてのモノと同時に、周囲に広がる環境やその質感といった要素も重要な役割を果たすことになる。^{*15}人類学者

る包括的な概念であると述べている〔Miller (ed) 2005: 4〕。これは物質性の概念が備える射程の広さを示す反面、曖昧性や多義性の吐露でもある。

* 14 人文諸学における物質性については優れたレビュー論文が日本語でもすでに複数存在する〔e.g. 森 2009; 太田 2019〕。

* 15 古谷嘉章は物質性について、物性、感覚性、および存在論という3つの問題系を指摘していた〔古谷 2017〕。物性とはモノ自体の特性である一方、感覚性は人間とのかかわりにおけるモノのあり方を指し、存在論とはそもそもあるとはどのようなことをめぐる議論である。明示的な形では区別しないが、本書もこれら3つの側面すべてに関わっている。

ティム・インゴルドは物質性 (materiality) という言葉の曖昧さを批判しつつ、むしろ流動的かつ一回的な物質 (material) に着目すべきことを主張していた [Ingold 2011: 24]。現実の環境は個物で設えられた静的なものではなく流動する物質 (媒質) の世界であり、「開かれた世界には、それ自体としてのモノは存在しない」 [インゴルド 2017: 179] とインゴルドは言う。「私の環境とは、実在するそのままの世界であり、私との関係において意味を帯びる」 [Ingold 2000: 20] のである。^{*16}

同様の観点から地理学者のサラ・ワットモアは、「物質主義者の帰還」と題した論文のなかで、「いまここ」で人間存在を含み込みながら紡がれる物質 (性) に再着目することが4つの移行をもたらすと指摘していた。すなわち言説から実践へ、意味から情動 (affect) へ、人間から人間以上 (more-than-human) へ、そしてアイデンティティの政治から知の政治へである [Whatmore 2006: 603-604]。4点目のみ少し言葉を補うと、知識が生産され社会に組み込まれていくやり方への関心のことを指している。これらの点はまさに、実際に移動することのリアリティを把握するうえで不可欠であろう。

たとえば私たちが歩くとき、地面は天候に応じて質感を変える。私は靴底を介して足の裏に一步一步その質感を感じて身体を調整し、思わず躓いたときには名付けえぬ心の揺らぎを感じる。これは機械を介していても同様であろう。アルゴノヴァ＝ロウによればシベリアのトラック運転手は、道を注視するとともにエンジンの音を聴き、背中で地面の感触を感じながら五感を動員して環境中を走行し、「少レタイヤの空気を抜いた車で雪を広く押し付け、長持ちする道を作る」 [Argounova-Low 2012: 75] のだという。私たちはたとえ飛行機に乗っていようと、乱気流の中で不意に空気の流れを感じるように、個々の身体は機械を介して常に周囲と物質的な接続を保つ [Adey 2010も参照]。移動にはその都度、個別の物質的な相互作用とそれによってもたらされる経験が存在し、私たちの移動は世界へと痕跡を残していくことになる。

* 16 こうした発想は、いわゆる「存在論的転回」の議論とも結びつく。アミリア・ヘナレらが『事物を通して考える』で論じていたのは、事物に対して意味が付与される、換言すると普遍の自然に対して文化ごとに異なった認識がなされるのではなく、事物とは概念であり、認識とは存在であるということであった [Henare et al. (eds) 2007]

3 移動することと滞留すること

3-1 公正な移動をめぐる

ただし移動の可能性は、万人に対して平等にもたらされるわけではない。ある者は世界中を飛び回る一方、別の者はその意図に反して滞留を余儀なくされる。^{*17} 国家は遊動する人々に定着を強制し、移民や難民の経路を制約して移動を管理しようとするだろう。また複雑にネットワーク化された輸送インフラは、一点のほころびによって思わぬ場所に人々を留めおくことにもなる。「いわゆる移動論の転回はまだ、そうしたモビリティが不動 (immobility) や滞留 (mooring) と取り結ぶ関係を強調する」[Sheller 2021: 5] ののである。

このことはミミ・シェラーが言うように、「モビリティ正義 (mobility justice)」[Sheller 2018a, 2018b] について考えることでもある。それは身体レベルから惑星レベルまで不平等に分配された移動の能力を精査し、そのあるべき姿について考えることである。「モビリティ正義とは、いかに移動の統治や制御のうちに権力と不平等が溢れており、それが人々や資源、情報の循環における移動性や不動性の不均衡を形成しているかを考えるための包括的な概念」[Sheller 2018b: 30] となる。

物質性に着目することは、こうした不公正を実際に移動する現場から捉えることである。たとえばウィリアム・ウォルターズは従来の移民研究には乗り物や道といった固有の物質性が抜け落ちていることを指摘し、移動を媒介するモノに着目することで、移民を国家の視点からではなくその過程から見ることが可能になると論じた [Walters 2015: 470]。そしてミシェル・フーコーの生政治 (bio-politics) をもじった経路政治 (via-politics) なる言葉を案出し、移動経路こそ強く生政治の働く場であることを主張している [Walters 2015]。物質性の観点から移動を考えることで、人々に移動を促し、またそれを停止させる物理的な構造と、そこに介入する政治経済的な力に対して私たちの目を向けさせるのである。^{*18} (cf. 第3章片論文、第11章村橋論文)。

本書では、移動の実践を観察すると同時に、移動とは図と地の関係にある滞

* 17 グローバルなビジネスエリートと切実なディアスポラの体験を「越境性」の語のもとに包摂することは問題含みでもある [古谷 2001: 78; Clifford 1994] という指摘は、「モビリティ」に対しても該当するだろう。本書の目的はむしろ、「モビリティ」の枠組みに包含されつつ、西洋近代の移動の制度からは周縁化された人々に焦点を当てることである。

* 18 モビリティと政治については、クレスウェル [Cresswell 2010] なども参照。

留にも目配りをすることで、移動という実践の周縁におかれた人々の声もすくい上げていく (cf. 第6章西尾論文)。加えて移動をめぐる各地の概念を検讨することからは、そもそも移動と滞留という二分的な認識自体が私たちの「常識」に基づく仮構に過ぎない可能性にも思っていた (cf. 第4章左地論文、第7章橋爪論文、第10章中野(歩)論文)。

3-2 人新世のモビリティ

移動を身体と事物と世界の関わり合いとして考えていくことは、アンドリュー・ボールドウィンらが「人新世のモビリティ (anthropocene mobilities)」という概念を提示しながら論じるように [Baldwin et al. 2019]、地球規模で直面する喫緊の課題について考えるための切り口ともなる。

人新世のモビリティの議論が批判的に論じる点のひとつは、「自然」や「環境」がモビリティにとって二次的なものと捉えられてきたことである。だが気候変動は人々に移動を余儀なくさせ、人々の移動はまた気候へと影響を与える。人々の動きとともに種子やウイルスといった「自然物」も移動するのみならず、地球そのものも流動している (cf. 第8章古川論文、第9章中野(真)論文)。人新世のモビリティという観点は、移動をめぐるそうした一連のつながりを明らかにするとともに、いかに人々のあいだや人間と非一人間のあいだで移動の能力が不平等に分配されてきたのかを、歴史-地質学的に構築されてきた過程から明らかにしていく [Baldwin et al. 2019]。たとえばそれは、ステファニ・フィセルが人と動物の異なった、だが重なりあう動きとそこに生じるロードキル^{*19}を取り上げながら論じるように、非一人間も考慮に入れたよりよいインフラとモビリティのあり方を模索することでもある [Fishel 2019]。

人間を中心に世界を捉えてきたことが環境危機をはじめとする目下の窮状の要因として指摘される現在、物質性という観点から移動を考察することによって、環境中で様々な事物と相互に結びつきながら移動し、かつ移動させられていく一存在として人間のあり方を捉え直すことが可能となる。またここには、グローバルな移動のネットワークに接続しながらも破壊的な近代には回収されないオルタナティブな移動のあり方を考察することの可能性も見出せよう (cf. 第5章難波論文)。人間中心主義の周縁から、また西洋近代の周縁から移動を見ることは、支配的なモビリティのあり方に抗して、より良き移動の未来を考えることでもある。

* 19 車両との接触による野生動物の死亡事故のこと。

4 本書の構成

本書は3部構成を取っており、それぞれ「ともに行く／変容する」、「作り出す／反転する」、「探る／流動する」と名付けられている。

第一部「ともに行く／変容する」では、移動する身体に焦点が当てられる。**第1章**で土井が論じるのは、スペイン・サンティアゴ巡礼と徒歩移動の実践である。繰り返される日々の歩行を通して立ち上がる儀礼の時空を分析する土井は、近年になって浸透した巡礼ガイドアプリが周囲の事物との驚きに満ちた出会いの機会を失わせる一方、巡礼者に反復を促すことによってその儀礼的側面を強化していることを指摘する。

ケニアの自転車競技選手を取り上げる**第2章**もまた反復される移動実践を主題化する。萩原は自ら選手として過ごした経験にもとづいて、移動のあとに疲労や故障といったかたちで身体へと残されるものを描き出していく。反復される移動と滞留の日々を通して選手たちがそうした残余とうまく付き合う方法を身につけると、そこには「ラウンドな世界」が立ち現れるのだと萩原は論じる。

他方で**第3章**の片はチベット難民と身分証の事例を通して、移動と滞留の政治的な側面を論じていく。紙切れに過ぎない物質を伴うことが持ち主の移動を可能とする一方、それを所持せぬものには単なる地上の線を越えたい障壁へと変える。そうした書類は情動を喚起し、持ち主とは誰であるかさえも決定するのである。さらに近年は身体測定技術の発展とともに、そうした書類が「身体化」していることも指摘される。

第4章で左地が扱う動く住まいの事例では、移動と滞留の区別はもはやさほど意味をなさない。左地は身体図式という観点からマヌーシュとアメリカの「ノマド」および日本のバンライフラーの比較を試みる。キャンピングカーのように類似した「動く住まい」とともに行くときも、それは個々の身体履歴やインフラ、社会制度によって異なった「組立^{アセンブル}=構成」を取り、別様の意味と主体を生み出しているのである。

第二部「作り出す／反転する」において主題となるのはインフラストラクチャーである。**第5章**で難波が論じるラオスの流れ橋は、近代都市の通念的なインフラとは異なり、それ自体が不安定で流動的である。「自然物」と「人工物」が組み合わせられ、季節に応じて定期的に流失し、変化する環境に応答して適切な場所に向け直される流れ橋は、自然とそこを横断する人工的なインフラ

というモビリティの前提を転覆させる。

第6章で取り上げられるのは、フィリピンのジープニーである。西尾は人間の関係そのものをインフラとして捉える議論に依拠しながら、都市インフラがいかんにか人々のケアによって支えられているのかを指摘するとともに、「インフラに対するケア」のインフラを構成するものとしての社会関係が論じられていく。人々のケアによって駆動し、走行とともに摩滅するジープニーという移動インフラは、人々の関係を含み込むことで走り続けることが可能となっている。

第7章で橋爪が論じるのは、ソロモン諸島の道路建設である。キリスト教化によって内陸にある祖先の土地との関係を一度切り離された人々は、車道という近代的なインフラの建設によってふたたび故地への帰還を目指す。だが真の祖先の土地はあらかじめ確定されえず、むしろ土地がもたらす兆候によってそのつど移動の是非をめぐる判断がなされる。ここでは動くのは土地であり、むしろ人々はそれに突き動かされているのだ。

第三部「探る／流動する」では、揺れ動く環境が前景化される。**第8章**では古川によってヒマラヤ山間部の移動と車道建設が論じられる。山間部の斜面は天候変化や地殻変動によって常に変化し続けている。人々は車道として平らな空間を作り出そうとする一方、山間部を運転することもまた歩くことと同様に、事物を介して大地の質感に応答しつつなされる実践と捉えられていることが指摘される。

第9章で中野真備が論じるのは、インドネシア・バンガイ諸島における海上移動である。大海原でも浅海でもない多島海で、漁師たちは既存の環境知と新たな装置を組み合わせながら漁場へと向かう。高山以上に流動し続ける洋上の環境において、漁師たちは櫂を通して海中の音を聞き、海底の「手触り」を確かめることで見えない地形を知る。揺れ動く海によって景観が変化すると、人々は新たな名をつけて再び景観を意味づけていく。揺れ動く環境はまた豊かな意味を含み持っているのである。

第10章で中野歩美が論じるインド・タール砂漠の移動民ジョーギーは、住まいとともに動くのではなく、行く先々で住まいを建てる。彼らもまた**第4章**に登場するマヌーシュと同様に定住化が進み、固定的な家に住むようになったものの、そこには環境中に潜在する豊かな素材に応答しながら即興的に住まいを建てる、「野営的な住まい方」があると指摘される。

第11章で村橋は、難民となった南スーダンの人々の移動過程を過去と現在

を比較しつつ描き出す。村橋は「経路政治」の概念を用いながら、「南」の国家を往来する人々のエージェンシーを捨象することなく、だが様々な事物や制度あるいは野生動物といった存在によって促されては阻まれつつ移動を繰り返す様子を分析する。ここでは環境はむしろ危険に満ちており、それを生き抜くための資源も不平等に分配されていることが浮き彫りにされる。

5 おわりに

前節で述べた本書の構成はあくまでも編者らが便宜的に定めた道筋であり、各章のあいだには無数の小径がリゾーム状に張り巡らされている。たとえばラオスの流れ橋とマヌーシュのキャラバンは同様に周囲のモノや環境を寄せ集める。また熟練したケニアの自転車選手に「ラウンドな世界」が現れることは対照的に、バンガイ諸島のベテラン漁師が触れ分けるのは、はた目には茫洋とした海の細かな質感である。あるいはいささか不謹慎な比較かもしれないが、サンティアゴ巡礼者やヒマラヤのトレッキング客が辛い徒歩旅行を真の経験とみなすように、南スーダンの難民も移動手段によって「真の難民」かどうかを判断していた。一見するとまったく異なった移動の様態がどこか類似した効果をもたらす一方、よく似た移動手段が地域によって異なった意味と形をもって存在している。

読者は、本章で示した大通りを一直線に進むように通読されてもよいし、脇道をすり抜けるように関心のある章を拾い読みされても結構である。インゴルド [Ingold 2010] が区別する、経路の定まった目的地への輸送 (transport) と気ままなぶらぶら歩き (wayfaring) は、良し悪しの判断ではなく、同じ事物の配置に対して異なった眺望をもたらすためのやり方だと考えたい。

他方で本書には数多くの制約もある。2点だけ弁解がましく述べておかなければ、1つ目は執筆者が文化人類学者に限られていることである。これは共同研究期間がコロナ禍と重なり、ゲスト講師を招いて議論する機会をほとんど持てなかったことが大きい。もう1つはジェンダーやエネルギーの問題、あるいは航空機による移動や自動運転など、現代の移動を論ずるにあたって重要なトピックのいくつかを取り上げられなかったことである。とはいえ移動をめぐる議論の領野は限りなく広がっており、とても1冊の書物による網羅を許すものではないことも確かである。本書の目的はむしろ、さらに遠くへと旅をするた

めのささやかな足場を作ることだと考えている。脆そうな足場であれば読者諸賢に叩いて確かめていただき、さらにその先の足掛かりを拵えるための素材のひとつとなるようであれば幸いである。

参考文献

- アーリ, J. 2003 『場所を消費する』 吉原直樹・大澤善信監訳 法政大学出版局。
- 2006 『社会を越える社会学——移動・環境・シチズンシップ』 吉原直樹監訳 法政大学出版局。
- 2015 『モビリティーズ——移動の社会学』 吉原直樹・伊藤嘉高訳 作品社。
- 青木保ほか編 1996 『岩波講座 文化人類学——第7巻 移動の民族誌』 岩波書店。
- アバデュライ, A. 2004 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』 門田健一訳 平凡社。
- インゴルド, T. 2017 「大地、空、風、そして天候」 古川不可知訳 『現代思想』 45(4): 170-191.
- エヴァンズ=プリチャード, E.E. 2023 『[新版] スアー族——ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録』 向井元子訳 平凡社。
- エリオット, A. & J. アーリ 2016 『モバイル・ライブズ——「移動」が社会を変える』 遠藤英樹監訳 ミネルヴァ書房。
- 太田茂徳 2019 「〈マテリアリティ〉という視点の諸相——「これは論文ではない」」 『空間・社会・地理思想』 22: 45-62.
- 小川(西荻)葉子・是永論・太田邦史編 2020 『モビリティーズのまなざし——ジョン・アーリの思想と実践』 丸善出版。
- 海部陽介 2022 『人間らしさとは何か——生きる意味をさぐる人類学講義』 河出書房新社。
- カースルズ, S. & M. J. ミラー 2011 『国際移民の時代 [第4版]』 関根政美・関根薫訳 名古屋大学出版会。
- 栗田和明 2018 「人の移動の普遍性——定住者の視点を離れて」 栗田和明編 『移動と移民——複数社会を結ぶ人びとの動態』 昭和堂 pp. 3-26.
- クリフォード, J. 2002 『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』 毛利嘉孝ほか訳 月曜社。
- クリフォード, J. & G. マーカス 編 1996 『文化を書く』 春日直樹ほか訳 紀伊國屋書店。
- スミス, V. L. 編 2018 『ホスト・アンド・ゲスト——観光人類学とはなにか』 市野澤潤

- 平・東賢太郎・橋本和也監訳 ミネルヴァ書房.
- チン, A. 2019 『マツタケ——不確定な時代を生きる術』 赤嶺淳訳 みすず書房.
- 床呂郁哉・河合香史編 2011 『もの人類学』 京都大学学術出版会.
- 野中健一編 2004 『野生のナビゲーション——民族誌から空間認知の科学へ』 古今書院.
- ハマラキス, Y. 2018 「強制移動と非正規移動の考古学」 村橋勲・古川不可知訳、『現代思想』 46(13): 81–100.
- 古谷嘉章 2001 『異種混淆の近代と人類学——ラテンアメリカのコンタクト・ゾーンから』 人文書院.
- 2017 「プロローグ 物質性を人類学する」 古谷嘉章・関雄二・佐々木重洋編 『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』 同成社 pp. 3–32.
- マリノフスキ, B. 2010 『西太平洋の遠洋航海者——メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』 増田義郎訳 講談社.
- モース, M. 1981 『エスキモー社会——その季節的変異に関する社会形態学的研究』 宮本卓也訳 未来社.
- 森正人 2009 「言葉と物——英語圏人文地理学における文化論的転回以降の展開」 『人文地理』 61(1): 1–22.
- 森田敦郎 2012 『野生のエンジニアリング——タイ中小工業における人とモノの人類学』 世界思想社.
- 吉田ゆか子 2021 「序文：〈特集：上演を紡ぐ人とモノ：マテリアリティの人類学と上演芸術の研究の交差点〉」 『国立民族学博物館研究報告』 46(2): 223–251.
- 吉原直樹 2022 『モビリティーズ・スタディーズ——体系的理解のために』 ミネルヴァ書房.
- 2023 「モビリティーズ」 友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編 『社会学の力——重要概念・命題集（改訂版）』 有斐閣 pp. 286–289.
- ラトゥール, B. 2007 『科学論の实在——パンドラの希望』 川崎勝・平川秀幸訳 産業図書
- Adey, P. 2010. *Aerial Life: Spaces, Mobilities, Affects*. Wiley-Blackwell.
- 2017. *Mobility (second edition)*. Routledge.
- Appadurai, A. (ed) 1986. *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge University Press.
- Argounova-low, T. 2012. Roads and Roadlessness: Driving Trucks in Siberia. *Journal of Ethnology and Folkloristics* 6(1): 71–88.
- Baldwin, A., C. Fröhlich & D. Rothe 2019 From Climate Migration to Anthropocene

- Mobilities: Shifting the Debate. *Mobilities* 14(3): 289–297.
- Brettell, C. 2003. *Anthropology and Migration: Essays on Transnationalism, Ethnicity, and Identity*. Alta Mira Press.
- Clifford, J. 1992 Traveling Cultures. In L. Grossberg, C. Nels & P. Treichler (eds) *Cultural Studies*, pp. 96–116. Routledge.
- 1994. Diaspora. *Cultural Anthropology* 9(3): 302–338.
- Cresswell, T. 2010. Toward a Politics of Mobility. *Environment and Planning D* 28: 17–31.
- D'Andrea, A. 2006. Neo-Nomadism: A Theory of Post-Identitarian Mobility in the Global Age. *Mobilities* 1(1): 95–119.
- Endres, M., K. Manderscheid & C. Mincke 2016. Discourses and Ideologies of Mobility: An Introduction. In M. Enderse, K. Manderscheid & C. Mincke (eds) *The Mobilities Paradigm: Discourse and Ideologies*, pp. 1–7. Routledge.
- Fishel, S. R. 2019. Of Other Movements: Nonhuman Mobility in the Anthropocene. *Mobilities* 14(3): 351–362.
- Gewertz, D., & F. Errington 1991. We Think, Therefore They Are?. *On Occidentalizing the World. Anthropological Quarterly* 64: 80–91.
- Hannam, K., M. Sheller & J. Urry 2006. Editorial: Mobilities, Immobilities and Moorings. *Mobilities* 1(1): 1–22.
- Henare, A., M. Holbraad & S. Wastell (eds) 2006. *Thinking Through Things: Theorising Artefacts Ethnographically*. Routledge.
- Harvey, P. & H. Knox 2015. *Roads: An Anthropology of Infrastructure and Expertise*. Cornell University Press.
- Ingold, T. 2000. *Perceptions of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. Routledge.
- 2010. Footprints through the Weather-world: Walking, Breathing, Knowing. *Journal of the Royal Anthropological Institute* (N.S.): S121–S139.
- 2011. *Being Alive: Essays on Movement, Knowledge and Description*. Routledge.
- Macnaghten, P. & J. Urry 1998. *Contested Nature*. Sage.
- Marcus, G. E. 1995. Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography. *Annual Review of Anthropology* 24: 95–117.
- Miller, D. (ed) 2005 *Materiality*. Duke University Press.
- Salazar, N. B. 2010. Towards an Anthropology of Cultural Mobilities. *Crossings:*

- Journal of Migration and Culture* 1: 53–68.
- Sheller, M. 2021. *Advanced Introduction to Mobilities*. Elgar.
- 2018a. *Mobility Justice: The Politics of Movement in an Age of Extremes*. Verso.
- 2018b. Theorising Mobility Justice. *Tempo Social* 30(2):17–34.
- Sheller, M. & J. Urry 2006. The New Mobilities Paradigm. *Environment and Planning A* 38: 207–226.
- 2016 Mobilizing the New Mobilities Paradigm. *Applied Mobilities* 1(1): 10–25.
- Walters, W. 2015. Migration, Vehicles, and Politics: Three Theses on Viapolitics. *European Journal of Social Theory*. 18(4): 469–488.
- Whatmore, S. 2006. Materialist Returns: Practicing Cultural Geography in and for a More-than-human World. *Cultural Geographies* 13: 600–609.
- Whyte, K., J. L. Talley & J. D. Gibson 2019. Indigenous Mobility Traditions, Colonialism, and the Anthropocene. *Mobilities* 14(3): 319–335.